

クルト・ヴァイルの歌に思うこと

ユダヤ人であるクルト・ヴァイルはナチの政権を逃れ 1933 年にフランスに亡命し、その 2 年半後にはアメリカに渡り 50 歳の生涯を終えるまで、ニューヨークでミュージカルの音楽を中心に作曲活動を続けました。

私はかなり前から彼のパリ亡命時代の何曲かを歌って来ました。それらの曲はノスタルジックで、心の中に埋められている哀しみや怒りや愛までもが呼び起こされるシャンソン。ヴァイルの歌が細かい霧のように、微笑みのように私に降り注ぎ、やがて私は彼の人生と作品にもっと近づきたいと思うようになりました。

ベルリンからパリ、ニューヨークへと移り行く土地は違っても、彼独自の感性と音楽の根に流れる“ヴァイルの言葉”は決して変わることなく、しかしそれぞれの土地の人々の音楽のスタイルを受け入れながら変貌して行く……

優しい歌。どんなに激しい歌だって潤んだ薄いそのエレガンスの膜で包み込む。美しい歌。決して強く押しつけることなくそのハーモニーの中で心をあやしてくれる。その歌は魂の溜息のように流れ出る……ヴァイルはそれぞれの人生の想いをゆらめく音の光の膜で包んで連れて行ってくれる人。何処に？優しい処に。

ローザ・ルクセンブルクには、以前にジャン＝クロード・エロワが彼女の為に作品を書きそれを手掛けたことがあり、以来深い想いを抱いていました。この録音の冒頭でローザへのオマージュを込めて歌います。

奈良ゆみ